

若手エンジニアに対する品質工学導入の端緒

・・視 点



品質工学会の前身である「品質工学フォーラム」が1993年5月に設立され、30年以上が過ぎている。会員数は900名強から始まり、年々増加して品質工学会へと改称した1998年には1300名を超え、2007年のピーク時は会員数2268名であった。一方で、ピークを迎えたこの年から会員の退会者数が入会者数を上回るようになり、会員数は減少傾向のまま現在に至っている。技術が多様化し、学会が乱立している昨今では、多くの学会が会員数の減少に頭を悩ませている状況ではあるが、当然、時代と共に淘汰される学術分野も存在する。品質工学は、時代に左右されない思想および汎用技術を有しているにも拘わらず、当学会の会員数が減少しているということは、品質工学を志す人材が減少しているとも考えられる。2000年前後に品質工学会に入会した当時の30～40代のエンジニアは、それぞれの会社で定年を迎える世代である。つまり、品質工学による適用事例がある会社や、その効果を理解した会社であっても後継者の育成に苦慮している状況もある。また、地方の企業団体で品質工学の講演をした際、聴講者の中には「品質工学を初めて知った」という若手エンジニアも少なくない。若手エンジニアへの品質工学の啓蒙活動およびその真の効果が、今後の学会活動に大きな影響を及ぼすと考えられる。現在の若手エンジニアに対して品質工学を導入するための端緒について議論してみたい。

―品質工学の認知はどの程度なのだろうか？

―田口玄一が1996年に米国品質協会ASQによりシュート・メダルを受賞し、翌年に米国自動車殿堂入りするなど、大きなトピックスがあった。

―この頃は、品質工学に着目するエンジニアや経営者も多かったと思う。

―田口玄一は、ペニシリンの生産改善やAT&Tの半導体実験などにも携わるなど、多くの確かな成果を残している。また、自動車業界など品質工学を活用できている企業は優れた成果も出している。

―それにもかかわらず、世の中の品質工学の認知は低く、全体最適には程遠い部分的な活用にとどまっているのではないだろうか。

―品質工学会ではずっと言い続けられていることではあるが、まずは、世代を超えて品質工学を認知してもらふ必要があると思う。

―若手エンジニアが主体的に品質工学を活用してみたいと思うきっかけは、最近では何だろうか。

―学会は2012年から品質工学の創始者である田口玄一の言葉をもらうことができなくなり、2023年からは学会創立の発起人である矢野宏からの指導も受けられなくなった。

―企業トップの意識が必要だと思う。

―トップダウンによる活用が品質工学拡大のためには重要であるとも認識されているが、実際はなかなか進まない。

―企業トップの問題だけなのか。若手エンジニアにも問題があるのか。

―「品質工学を活用しなさい」といって、現在の若手エンジニアはすんなりと理解してくれるのだろうか。

―「品質は社会の損失である」というものさしや、「社会の自由の総和の拡大」を目指すというフレーズで感銘を受ける、もしくは理解できる若手エンジニアが今の日本にどれくらいいるのだろうか。

―意外とたくさんいるのではないかな。

―同感である。

―若手エンジニアに限らず、ベテランのキーマンが最近品質工学を知って衝撃を受け、自分自身のパラ